

Q1 「アクティブ・ラーニング」って何ですか。

A 「アクティブ・ラーニング」は、学習指導要領改訂に向けた「中央教育審議会教育課程企画特別部会論点整理（平成27年8月）」（以下「論点整理」という。）において、「**課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び**」とされています。形式的に対話を取り入れたものや、特定の指導の型や技術を指すものではなく、授業改善を進めていく上での考え方として示されているものです。

Q2 なぜ「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善が求められているのでしょうか。

A 子供たちが、21世紀の社会を生き抜く力を身に付けていく上で、有効な授業改善の考え方だからです。
今日、グローバル化や情報化等の変化が加速度的となり、急速な社会変革が現実になる中で、何が重要かを主体的に考え、他者と協働しながら新たな価値の創造に挑むことが強く求められています。このようなことから、**21世紀の社会において欠かさない資質・能力を引き出し高める**「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」の視点による授業改善が、小・中学校、高等学校、特別支援学校の全校種に一貫して、そして総合的な学習の時間だけでなく、各教科等の全てにおいて求められるようになってきているのです。

Q3 どのように授業改善すればよいのでしょうか。

A 学習指導要領の目標や内容を明確にし（押さえる）、子供たちの実態等を捉えた上で、「**解決したい課題や問い**」、「**考えるための材料**」、「**対話と思考**」、「**学習の成果**」の4項目を意識し、**授業を構想していきましょう**（仕掛ける）。そうすることで、子供たち一人一人が見通しを持って学習に取り組み、自ら学習を振り返って次の学びに向かうことにつながります。

上記4項目の詳細は、裏面の「授業設計診断」に示しています。裏面の診断に基づく授業設計は、**対話を通じた協働的な問題解決のプロセスの中で、「育成すべき資質・能力の三つの柱」（中央図参照）に示す力を総合的に活用・発揮させるもの**であり、「深い学び、対話的な学び、主体的な学びの過程」（右囲み参照）を実現するものです。新しい時代を切り拓くために必要な資質・能力を引き出し、高めるものとして、授業改善に役立ててください。

なお、授業後は「子供たちにどういった力が身に付いたか」、「子供たち一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうか」を確認し（確かめる）、それを授業改善や**カリキュラム・マネジメントに生かす**ようにしてください。

Q1 「カリキュラム・マネジメント」って何ですか。

A 各学校が設定する教育目標を実現するために、**学習指導要領等に基づき、教育課程を編成し、それを実施・評価・改善する営み**です。この「カリキュラム・マネジメント」については、「論点整理」において、①教科横断的な視点や、②P D C Aサイクルの確立、③教育内容と教育資源の効果的な組合せといった三つの側面で整理され、特に①の**教科横断的な視点**が強調されています。

「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のP D C Aサイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

（「論点整理」より引用）

Q2 なぜ教科横断的な視点が強調されているのでしょうか。

A 自校の子供たちに対し、必要な資質・能力を確実に育成するためには、教科横断的な視点から、各教科等の授業や学校内外の教育資源を柔軟に組み合わせたり、再配置したりすることによって、各教科等の授業をはじめとする**教育実践の効果を最大限に高めていく必要がある**からです。

Q3 どのように教科横断的に取り組めばよいのでしょうか。

A 「カリキュラム・マネジメント」については、管理職のみならず全ての教職員がその必要性を理解し、日々の業務に取り組む必要があります。なかでも教科横断的な取組については、とりわけ**教員一人一人がその主体となり活躍することが**期待されます。以下に教員一人一人や、役割に応じて期待される取組について示したので確認してください。



深い学び、対話的な学び、主体的な学びの過程 （次期改訂が目指す授業改善の視点）

- i) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか
- ii) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか
- iii) 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか

（「論点整理」より引用）

（一人一人の取組）

- 全教科等の学習を通して、自校が育成すべき資質・能力を重点的に育成する。
- 「**解決したい課題や問い**」について、教科等を横断する主題を設定して取り組む。
- 教科横断的な視点から「**考えるための材料**」を検討する。
- 「**対話と思考**」を深める手立てや、「**学習の成果**」を高める評価（例えば、学びの深さや学びの変容など）について、教科を横断して他の教員と情報共有する。
- 各教科等の学習の中で、I C Tや地域の人的・物的資源を有効に活用する。

（役割に応じた取組）

- 教務主任等は、教科横断的な視点を持って、学校教育目標を実現する「社会に開かれた教育課程」を編成し、その質を向上させるP D C Aサイクルを確立する。
- 研修主任等は、教科横断的な視点を持って、「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラム・マネジメント」の質を高める授業研究を中心とした研修を企画・運営する。
- 学年主任、生徒指導主任（主事）、進路指導主事等は、教科横断的な視点を持って、担当する業務と自校が育成すべき資質・能力等との関係性を明確にして組織運営に当たる。

アクティブ・ラーニングの視点を持つ授業例

本県においては、すでに「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」の視点を持つ授業が見られます。

小学校 5年 国語科「C読むこと」

登場人物の相互関係や心情、場面の描写を捉え、優れた叙述について自分の考えをまとめる

【解決したい課題や問い】

- 「『心にぐっときたベストシーン』はどこだろう。具体的に説明できる形で友だちに推薦しよう。」

登場人物の会話や行動、情景などに暗示的に表現されている心情を、想像を豊かにして読む学習です。「心にぐっときたベストシーン」について、理由や根拠を挙げながら友達に推薦するという、対話を必要とする課題を設定することで、児童は深い学び、主体的な学びに向かっていきます。

【考えるための材料】

- ①「大造じいさんとがん」（教科書）、
② 椋鳩十の1作品（教師が示した10作品から各自が1作品選定）の二つの教材

教科書教材の物語と、同じ作者が書いた別の物語との二つの作品を材料にします。二つの教材のそれぞれ優れていると感じた叙述について、友達との対話により自分の考えを深め、確かなものにしていきます。教科書教材だけでなく、自分で作品を選ぶことが、自発的に読みたいという意欲を喚起することにもつながります。



友だちとの対話を通じて、自らの考えを広げ深める。

【学習の成果】

- まとめた推薦文をもとに、自分が選んだ物語のベストシーンを友達に紹介して、交流活動を行います。



交流活動の中で、共感する考えや自分とは違う考えがあることに気づき、さらに深めていきたい疑問が明らかになったり、実生活で本を読むことの楽しさを実感したりすることにつながります。

【対話と思考】

- ペアになり、「大造じいさんとがん」のベストシーンの叙述について、理由や根拠を挙げながら互いに説明し、共通点や相違点を語り合ったり、質問をし合ったりします。こうした交流活動を、ペアを交換しながら複数回行います。
- 次に、自分の選んだ物語について、ベストシーンだと感じる優れた叙述を選びながら読み、友達に推薦するための文章を作成します。

児童一人一人が、教科書教材について優れた叙述を見つけ、複数回の異なる仲間との対話を通して学びを深めていきます。各自が自分のことばで説明したり、相手のことばを自分の考えと引き比べて聞いたりする活動を、各自が選んだ作品においても行います。

中学校 3年 理科「大地の成り立ちと変化」

【解決したい課題や問い】

- 「どうして同じ静岡県にある河川なのに、砂の様子が違うのかな。」

静岡県の狩野川、大井川、天竜川それぞれの河口付近の砂が提示され、「どれが、どの河川の砂か調べたい」という、生徒にとって解決したい問いになっています。



【考えるための材料】

- ①静岡県の地質図
②3つの川の河川勾配図
③砂粒の大きさを比べる実験方法
④砂粒にふくまれる鉱物を調べる観察方法

「調べたい」という思いを持った生徒が主体的に探究するための手掛かりが示されています。

仲間とかかわりながら、科学的探究に取り組む。

【学習の成果】

- 班で考えた実験方法で探究し、課題に対して自分なりの結論を見つけることができています。
- 生徒からは、「身近な河川や海岸の砂は、どこからどのようにして運ばれてきたのか」など、追究したい新たな問いが生まれます。

班で考えた実験方法を用いて探究することで、観察・実験の結果を実験の目的と関連付けて考察する力が引き出されるものとなっています。

【対話と思考】

- 「どれが、どの河川の砂なのか調べる」ために、4つの「考えるための材料」を、班の間で分担して学習します。
 - (活動1) 例えば、①を担当した者のグループは、静岡県の地質図を基に3つの河川が、どのようにしてできた土地の上を流れてきたのかについて理解を深めます。
 - (活動2) 班の仲間が、それぞれ分担して学習してきた「考えるための材料」を使って、班として実験方法や予想される結果について対話を通して考えます。
- 班の仲間全員に、対話に必要な異なる情報を持たせることで、生徒一人一人の主体的な学びや深い対話につながるものになっています。

これらの「授業例」や当リーフレットの「授業設計診断」などを考える材料にし、教職員同士の対話を大切にしながら授業を創造していきましょう。

高等学校 1年 公民科 現代社会「民主社会の原理と日本国憲法」

【解決したい課題や問い】

- 「憲法改正をしやすい」ことに、賛成か、反対か。

二者択一の問いを立てることで、生徒の思考を促し、その後の活動を焦点化させることにつながります。これにより、生徒は学びに見通しが持てます。

【考えるための材料】

- 賛成、反対の論拠となるそれぞれ7つの論拠

賛成、反対の立場をとる際に必要となる論拠を複数提示します。考えるための材料として、多様な論拠を提示することで、多面的・多角的な思考や、複数の論拠の比較・統合などの思考を促すものになります。

● 「憲法改正をしやすい」に賛成

- ①日本国憲法は、時代に対応できなくなっている。
- ②憲法改正の国民の意見を聞くために、国民審査が必要。
- ③国民のサービスや利益を考え、保障する内容を検討。
- ④人が作ったルールであるため、完璧とは断言できない。
- その他3つ。

● 「憲法改正をしやすい」に反対

- ①頻りに改正があると、国家が不安定になる。
- ②権力に人権を守らせるには、改正条件は厳しくすべき。
- ③他の硬性憲法の国々でも、憲法改正は行っていない。
- ④時代への対応よりも、大きな国の方向性を示せばよい。
- その他3つ。

根拠をもとに主張する力を引き出し、高める。

【学習の成果】

- 憲法改正手続きとその課題を、自らの課題として考察し、根拠をもとに主張する力が引き出されます。
- 他者の立場を踏まえて譲歩しながら、自己の主張を行う対話によって、合意形成する力が引き出され、国家・社会の形成者としての意識が高まります。
- 対話を通して生まれた、新たな疑問はワークシートに記入します

生徒は対話から生まれた新たな疑問をワークシートに残すことで、次の主体的な学びにつなげていきます。

【対話と思考】

- 3~4人のグループに分かれ、賛成、反対の根拠となるそれぞれ7つの論拠を「考えるための材料」にして、「憲法改正をしやすいことに賛成か、反対か」を議論します。

- その後、それぞれのグループが、賛成か、反対か立場を決め、理由や根拠とともにミニホワイトボードに可視化し、全体の前でプレゼンテーションをします。

適切な規模のグループ編成であることや議論の過程を可視化することで、建設的なやりとりが生じやすいものになっています。



特別支援学校 知的障害 高等部 作業学習（領域・教科を合わせた指導）

【解決したい課題や問い】

- 「地域の方と触れ合えるコミュニティガーデンを作ろう！」

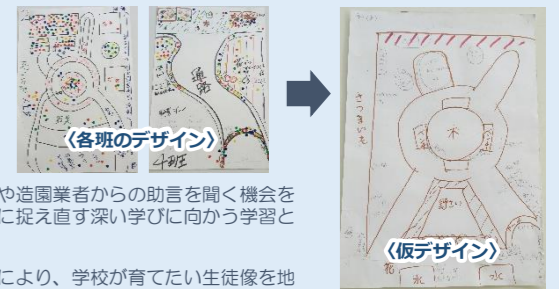
校内の一部を改装して、地域の方と触れ合える花壇や畑のあるコミュニティガーデンを作る学習です。この学習は、課題解決の過程において、生徒同士の対話と協働を必要とするものであり、深い学びが期待できる単元となっています。

【考えるための材料】

- ①自分たちで考えた仮のデザイン
②地域のニーズ
③造園業者からの助言

仮デザインが決まったところで、地域のニーズや造園業者からの助言を聞く機会を設けます。複数の視点を加えることで、総合的に捉え直す深い学びに向かう学習となっています。

地域の人的・物的資源を積極的に活用することにより、学校が育てたい生徒像を地域と共有することができ、学習の目的に合った材料を得たり、連携して生徒を育てたりすることができます。



自分で考える楽しさや仲間と共に活動する喜びを実感する。

【学習の成果】

- 目標や学習経過を、文字や写真で作業日誌に記録することにより、生徒が自己省察できるようになります。
- 自分の考えの変容について、課題解決の過程に沿って記録することで、生徒自身の成長の自覚につながります。
- 完成後には、地域への広報計画を作成したり、コミュニティガーデンの活用及び維持の方法について検討したりするなど、学習活動が更に広がります。

* 領域・教科を合わせた指導においては、領域別、教科別の指導との関連を図ることが大切です。横断的に活用することで、学んだことを生活の中で使う力を育むことにつながります。
例) 作業学習の材料の測量の仕方について、数学で取り上げて学習する。国語で学んだ手紙の書き方を思い出し、コミュニティガーデンへの招待状を書く。特別活動で、収穫した野菜を使って調理をし、地域の方との交流を行う。

【対話と思考】

- 地域のニーズや造園業者の助言をどのように反映するか対話を通して考え、本デザインを決めます。
- 作業の中で生じる課題については、生徒同士が対話して考える時間を十分に確保します。

作業現場で作りながら対話することで、生徒が活発に思考する学習となっています。



授業は常に目の前の子供たちによって変わっていきます。子供たちの発達の段階や発達の特性、教科等の学習内容、単元の構成や学習の場面等に応じた方法について、研究を重ね、ふさわしい方法を選択していくことが重要です。